

れてならない。私には、戦友よ安らかにお休みなさいと祈るしかすべがない。

私は、和歌を良く作る。戦場の和歌はもちろん、A4ノートいっぱい書いた歌集のなかの二作を文中に掲載している。

また、庭には入団した「舞鶴海兵団東兵舎」と名付けた約百㎡の「海軍資料館」があり、個人で収集した約二千点の貴重な軍装品などを収蔵している。

生きるものの証言

鹿兒島県 児玉 俊 夫

私は、昭和二（一九二七）年生まれ、昭和十八年に海軍に入り、普通科看護術練習生としての教育を終え、嬉野海軍病院、横浜船舶警戒部を経て、昭和二十年一月十日、神戸三菱造船所で艀装中の「ぱれんばん丸」に乗船する。同船には、約百八十人の船員等が乗り組み、シンガポールでガソリン、錫、生ゴムを積み「良栄丸」と共に出港、カムラン湾を出た三月四日、米軍潜水艦の攻撃により、ガソリンに引火して沈没、私は救助された二、三人の中の一人でした。

救助に当たった「第六十九号海防艦」には京都府の鶴原甫さんが乗艦していた。

海軍軍人への道

- 一 軍人は忠節を尽くすを本分とすへし
- 一 軍人は礼儀を正しくすへし

- 一 軍人は武勇を尚ふへし
- 一 軍人は信義を重んずへし
- 一 軍人は質素を旨とすへし

当時、軍隊に入った者は、皆この軍人勅諭なる「聖訓五箇条」はいつでも、教員、上官に言えと言われれば、間違いなく言えなくては鉄拳が顎にとんでくる。気合がたるんでいるという。

旧兵と新兵、海軍では階級が下でも飯の数で物を言う。一教班十五人ぐらい、教班長は五年から十年海軍に在籍したもので、新兵教育は海兵団で四カ月、みっちり娑婆気をなくし、半人前の海軍軍人へ育っていく。

海軍には「バツタ」「カシタ」「マエササエ」がある。

「バツタ」とは両手を上にあげ両足を開き、尻を突き出し櫂の棒で尻を叩く。三つぐらい叩かれ、「アリガトウゴザイマシタ」といって自分の列に帰る。

「カシタ」とは片側六人両側計十二人で漕ぐボ

ート（短艇）。体が小さくてもオールは同じで、両手には豆が出来、尻の皮は赤くなり、むけてヒリヒリする。

「マエササエ」は時間がたつと姿勢がみだれ、膝がついてしまう。一時間もするともうだめ。

血気盛んな新兵の中に徴兵（三十歳）できた鬚面の野郎もいた。大正十一（一九二二）年から昭和二年生れで、これが第八十分隊、第八十一分隊であった。ここで否応無しにみっちり新兵教育をたたき込まれる。「オソイオソイ」「何をマゴマゴしとる」「早くしろ」と大声で、追い立てられる毎日である。

兵種が確定した新兵は、その兵種の訓練を受けなければならぬのが軍の建前。そうなると愚痴っぽく「俺、こんなにつらいもんだとは思わなかった」といい、これから先長い年月、毎日こう絞られたら体が幾つあっても足りないぞとなる。

それにひきかえ軍楽隊はいいな、一日中ブカブカドンドン気楽でいいなあ、俺にもできるような

気がする軍楽隊になりたいなど切実に願う奴も出てくる。ここで鬼軍曹に匹敵する教班長の出番がやってくる。ケツに毛の生えた海軍猛者たちは、この辺のコツを百も承知、二百も合点しているから、舌なめずりしながら奥の手を出す。何も知らない新兵様は、いびりをはじめるとも知らず。

「総員集合、各班ごと整列」と声がかかる。

古参教班長が腰に手を当て反身になり、おもむろに口を開く。教班長に注目。「今から言うことをよく聞け。お前たちのなかで軍楽隊になりたい者は一步前に出ろ。才能あるかなしか査定して、合格した者は、さっそく手続きをしてやる。あの風雅な軍楽兵になると、晴れて真白な美しい毛をつけた軍帽をかぶれるんだぞ。分かったな。志願する者はただちに中央通路に集れ」という。かくて脳細胞のいたって単純な若者十数人が、この機を逃してなるものかと目の色を変えて我先にと飛び出し、駆足で中央廊下に並ぶ。

「ニタツ」と笑みを浮かべた教班長は我が意を

得たりと一步前に出る。「もう外にいないなあ」と念を押す。「よし、外の者は解散、直ちに見学の位置につけ。ただ今から性能テストを始める。志願者は金タライ小食器を持って一列に並べ」。本気が半分、あと半分は不安な気持で見学者の仲間入りをして彼らを見ていた。

「準備が出来たら皆んな楽な姿勢で聞け。お前たち娑婆で歌っていた軍艦マーチを知っているだろ。各自めいめいもっている金タライをその茶碗で叩いて拍子をとり、でっかい声を出して『守るも攻めるも』を歌いながら兵舎の内を歩け。うまい者から選り分ける。皆な分かったな。用意はじめ！」

志願した者はここぞとばかり声を張り上げ、思い切り真鍮の金タライを叩いて行進を始めた。耳をろうする騒音が兵舎の天井にこだましてくる中を、彼らは真剣な面持で兵舎内を一周して歌っている。採点するはずの教班長の面々は腹をかかえて笑い転げている。

やつと事態を呑み込めた。我々は、なぶり者に
されている同年兵の顔を見るのが辛かった。

兵舎を一巡すると状況は一変した、やおら立ち
上がった教班長は大喝一声「止め！元の位置にも
どれ！」。志願者は駆足で中央通路に集まった。
仁王だちになった先任教班長は、志願者たちの顔
をひとまわり眺めわたし一歩前に出た。

「この馬鹿者、海軍はそんなに甘くはない。お
前ら志願して海軍軍人になり軍服を着た以上、タ
イコを叩いたり笛を吹いたりするちんどん屋にな
るなんて貴様ら気合がたるんどる。これから根性
を叩き直してやる。ブツ倒れるまで気合を入れて
やる。両足を開け、踏ん張って歯を食いしばれ」。
頭を何発くらったやら、教班長連中はいろんな
シゴキを知っている。これも班長連中も新兵時代
にやられてきた道で、こんなにシゴかれ、やがて
一人前の軍人になって行く。

「バツタ」「カシタ」「マエササエ」。海軍の飯
を食った者は一度は通った道だ。海軍を恨んでは

いない。人間として何か多く学んだことがあった。
命のやりとりをして戦場から生きて帰り、戦後
の日本の復興に努力し、亡くなった戦友の慰霊の
ために平和を守らねばならない。

戦争には絶対反対し、平和のためにまだまだや
ることがある。思い出したくない戦場での出来事、
燃えながら沈みゆく船上に負傷者を置き去りにし
て、自分だけ助かって一人内地に帰る。しかし乗
組員全員の戦死認定書を作成して第二復員省に提
出し、全員戦死が認められたのが、せめても亡き
友の慰霊のためになったと思う。

停車場 ホームを乗降した人たち

私たちの小さいころは、駅をひつくるめて「停
車場」と言っていた。今は昔と変り跨線橋を渡り、
ホームに降り、電車に乗り降りしなくてはならな
い。現在の駐車場には積荷が雨に濡れないよう貨
物を積むホームがもう一つあった。何気なく乗り
降りする、通学、通勤に利用するホームである。

我々の年代（八十歳）の者の十五歳の春、子だ

くさんでどこの家庭にも五人、八人はいたようだ。女子は紺のモンペに羽織、足袋に下駄ばき、靴なんかあるはずがない。ないないづくしの世の中。

「勝つまでは欲しがりません」という。阪神方面の紡績工場の女工、油差しの男工、軍需工場は十六歳からであった。

私たち年代の若者が親弟妹の別れの涙のしみこんだホームである。また戦死した子供の遺骨の入った白木の小箱を胸に抱き、人前では涙を見せない母親、名誉の戦死、まだ我が子は十七歳。遺骨もなく、どこで死んだか。沖繩に行く途中か日本に帰る途中か、南シナ海方面で戦死という通知(公報)のみである。

私も一人生き残り、千葉富津町で二人乗り豆潜水艇の訓練基地で、毎日、豆潜に乗り組んでの訓練、死んでも潜水艦だけは乗りたくなかった。

朝からB29やグラマン戦闘機の空襲で豆潜水艇の事故がある。夜引き上げ作業と水抜き作業がすむと、豆潜からの死体の引き上げは私の任務。よ

くしたもので宿舎は富岡のお寺さんで、その住職さんは出征中でしたが通夜と遺品整理をします。

昭和二十三年、四年になり、ソ連シベリアからの引き揚げが始まり、死んだと思っていた夫、息子を涙々で迎えた親、弟妹、妻、子供たちを迎えた停車場である。

二年ぶりに降りた故郷の市来駅ホーム。ここへ私も生きて帰ったのです。一番年若い太平洋戦争の生き残り。戦争が始まって一年足らず、十四歳五カ月から十五歳九カ月の若年兵が横須賀、呉、佐世保、舞鶴へ三千五百人が入団した四期生。うち前線に出た者千五百人、四割が戦死している。市来町でも昭和三年生れが二人戦死している。

戦後、戦死した友の母親と会うのが一番辛かった。「生きていたら(おはん)と同じ年で仲もよかし。孫もいないの」と言われるのが一番辛かった。こういう戦争を語り継ぐにもどうしたらよいか。もう年がない。

近ごろは肺を悪くし酸素吸入をする体。作業中

に倒れた木に胸部を押えられて失神し、肋骨を左四、五番の二本がヒビ折り、肩甲骨、韌帯損傷、両足は少し痺れ、杖をつかないと足もとがおぼつかない。少々の傷でも痛みも感じないほど。

しかし海軍時代「バッタ」「カシタ」「マエササエ」で鍛えた体も年には勝てない。「バッタ」とは野球バットみたいな檜の棒で尻を叩く制裁。「カシタ」とは片舷六人計十二人で漕ぐボート競争。

「マエササエ」「腕立て伏せ」など、これらは生きていく間忘れることはない。

九月に鹿児島島の病院に行くのに電車を利用した。六十三、四年前、親兄弟、部落の町長、町婦人会長、青年団の人々が日の丸の旗や幟を打ち振り「万歳！万歳！」の聲に送られた停車場である。人の前では「名誉の戦死を頼む」と言っても十五歳の子供を戦場に送れますか現代のお父さんお母さん。当時、私の父は四十二歳、母三十九歳であったと思う。戦争には何が起るか分かったものではない、海上を飛べない陸軍戦闘機に沖繩特攻出撃を

させ、やたら若人を死に追いやる。「本官も必ず最後は諸君の下に行く」からと送り出した参謀等は、終戦の詔書を聞くや、二、三カ月で姿を基地から消してしまった。

士官には必ず従兵が付き、身の回り、洗濯、靴みがき、日常生活の世話をする。この兵隊にも配置があった。我々は普通科、看護学校を卒業して左腕に一重桜花の特技章を付けていたから「あいつら普通科卒だから高等科、特習科、専習科へ進み、十二、三年すると兵曹長、準士官になるんだから今のうちに鍛えとけ」といわれていた。

我々のときまでは一年半ぐらいで母校訪問があった。昭和五年生れの高等科二年生の前で海軍の話をする。本年度の志願問題等を話し、三日して、また再びこのホームに生きて降りることができるか、戦地行きかと思いつつ帰隊したものでした。

まもなく船舶警戒隊、武装商船「ばれんばん丸」乗り組みとなりシンガポールへ行き、仏印沿岸の商船の墓場といわれていた海岸線を見て、この分

では無事では帰れんと思った。

生れて初めてのシンガポールの市内見学、石鹼類、砂糖、皮製品等を買う。給金が内地の六倍くらい。十銭でもらうタバコが市内では十円。日本軍票は紙屑に等しく、海南島、香港でもそうであった。日本は負けると先を見ていた市民は中国系、インド系の人、マレー、インドネシア、ビルマの子供たちは片言の日本語がうまい。シンガポールの港でもガソリンを積み込み中もB29の空襲があるのかと驚いた。早々と内地へ帰ることだ。

昭和二十年二月二十七日、内地へ向け出港、マレー半島に沿って北上、航海科員が水深を計りながら。船は北へ北へ、着いた所がタイ領サンヂャク港。この港も日本の墓場で帆船ばかりである。

ここで一番船に「良栄丸」、二番船「ばれんばん丸」、護衛艦として「海防艦一号」「同六九号」「同一三〇号」「同一三四号」の四隻。いよいよ出港、早くも夕方から船団後方に怪しい水中音が付きまとうという情報は、我々皆が知っていた。

魚雷一発で五千二百トン、長さ百十三メートルの船が一分足らずで沈む。八千八百トンの航空用ガソリンが大爆発する。火の海の中から火勢が弱い所に飛び込ませた隊員、三十四、五歳の召集兵である。水泳訓練を受けていないから飛び込んでも金槌、私の周囲では一人も泳いでいない。

夜が明け岬に白い灯台が見え、建物に日の丸の旗が見えた。助かった。しかし寒さから体を守るために三種軍装を着たままではなかなか前に進まない。それでも五時間くらいかかって、ようやく灯台下の岩場に上り、休んでいた。

上に引き揚げられたけれども、お茶も朝食ももらえない。寝ていたら海軍さんの軍艦が来ていますと起され、すぐ手旗を借り「セイゾンシヤニメイアリ タスケタノム」と信号を送る。すぐ返信があり「下りてこい」という。迎えのボートが来て、ここで助かったとの安心感が沸き、涙がとどめなく出てくる。

艦の後部の軍艦旗を見て元気が沸いて来る。お

粥に梅干しをもらい、その後どこに寝たか。翌三月五日、ラエを出港して海南島に向う。三月五日十一時三十分ごろ前方でドカンと大きな爆発音、「良栄丸」一二、〇〇〇トンの一番大きなタンカー船も積荷が重油で後部から沈んでゆく。何か大きな岩が立っているようである。

すぐ「海防艦第六九号」でも「前進微速、救助作業にカカレ」である。艦の前方目掛けて泳ぐ者、艦を目掛けて泳ぐ者。艦は前進している。前方に泳いでゆくものは助けられるが、艦を目掛けて泳いでくる者は後方に流れて行き、引き返して助けることもできない。それでも十人は救助した。そして艦は「前進全速！」。

後で分かったことだが「ぱれんばん丸」を攻撃した米潜水艦は「バヤーア号」と言い、同艦は二日で二隻を沈めた訳である。

海南島から帰りに再びやられ、身山列島でB25と交戦、ようやく三月二十六日に門司港に上陸できた。そして門司支部から病人を横浜に連れて帰

ることになった。

門司駅のホームも、当時、大陸に渡る人、南方戦場に行く兵隊たちの涙のしみこんだホームである。門司港駅から連絡船で下関に渡り、また汽車で阪神方面に行く。私たちも五人で横浜桜木町駅まで行った。このホームも、ブラジルへ移民として行く家族と、見送りの人々が涙がかれるまで泣いたホームである。

昭和二十年八月十五日終戦となり、どこの駅も何日も列車を待った。ホームに並んで順番を待っている。我々特攻隊員は早く復員させないと何をしでかすかわからない。無蓋貨物車に乗る。米、缶詰、ジャム、乾パン、食料は十日分ぐらいほかに衣類、医薬品、医療器具などを持っていた。鉄橋が爆弾で切断され、一駅を歩くつらさ。

一、二日待つ間に飯盒で飯を炊く。鯖の缶詰で飯を食うにも、周囲の目が気になり戦友同志で食う。食べものがなく空腹な眼でじろじろ見ている子供には分けてやる。二食分炊いても足りないよ

うになる。乾パンをかじる。

ようやく動き出した貨物車も広島で足留め。こんなひどくやられているとは思っていなかった。衛生兵であることを隠し、薬や器具をもっていることも隠したが、乗り合わせた人たちが「あの兵隊さんは衛生兵、薬をたくさんもっているよ」と言ったから職業がバレて、広島の下道で三日間、医療業務に奉任した。

九州に帰る同年兵の豊田、大分の山中も亡くなって十年近くなる。山中も豊田も私も、原爆が投下された十日目に広島駅で患者の治療に従事して、二人共原爆症に罹っているのではなからうか。

自分も八十路になり、肺気腫症になり、腰椎すべり症、肩部靭帯損傷、両足が少し麻酔症状で、転んで擦りむいて血が出ても痛くもかゆくもなく、気付かない近ごろである。転ばぬ先の杖で孫からもらった小遣いで杖を買ったら離せなくなった。

鹿児島市内の病院へ行くのが一番つらい。上海事変、満州事変、支那事変、南方へ行く歩兵第四

十五連隊、後の西部第十八部隊の軍人軍属や、集団就職の十五歳の少年少女の涙のしみこんだ「市来」駅のホーム。ここに私は生きて帰った。

戦時にはどこの駅のホームにも悲喜こもごも涙がしみこんでいると思う。これは年寄りのぐちであるうか。

戦後生れの知識人が戦争反対を言う。軍靴の音が響いてくる、硝煙の匂いがしてくる、というが、その硝煙の匂いを嗅いだだことがあるか。見てもいない戦場の現場で、「行きたい」と助けを求め戦友を置き去りにできるか。

手を差し伸ばして海から引き揚げようとすれば自分も引き込まれ、必ず死の現場となる。自分だけが生きることになり、他人事ではないのが戦場なのだ。二月、三月の南方の海水温は一八度、揚子江沿岸や玄界灘では五度。人間の体は五度の海の中では十分間は泳げるけれども十分以上はもたない。社会に通用しないことが起るのが戦争である。

我々のように十四歳五カ月から十五歳九カ月の少年（いや子供）まで兵隊として戦場に送られる。私の母は三十九歳で長男を戦場へ、兵隊として出したことになる。現在のお母さん、四十歳ぐらいのお母さん方、生きて帰る保証のない戦争に子供を送り出せますか。これが六十数年前の戦争です。金儲けに心を奪われず、社会人として親として子供を教育して、平和を考え社会のため人のためになる子供に育て下さい。

私には一男三女の子供がいます。四人共看護師、その長男の嫁まで看護師。孫が三人、そのうち歯科衛生師が二人、孫の婿が一人外科医です。娘三人は親子で看護師をしている。

良いところは「爺さん息づかいが悪い。診察してもらえ」と言い、早く病気を見つけてくれることです。自分の体がこんなにボロボロになっているというのを、現代医学では五カ所も見つけてくれた。だが手術が出来ない体、体内酸素不足で負けずに病気と戦っている毎日なのです。